

「希望と恐れ嵐の中でなお『何が起ころうが構わない』と言うことができること」とはそのことに他ならないのである。

以上のように、ヤスパース形而上学とは、私たちの超時間的在り方としての実存の可能性を示しながら、同時に内時間的在り方としての現存在を忘却しない思想なのである。

ヤスパースにおける存在の思弁

布施 圭 司

本論考は、ヤスパースの最後の主著と言える『啓示に面しての哲学的信仰』*Der philosophische Glaube angesichts der Offenbarung*, 1962 における「存在の思弁」(Seinsspekulation) による「あらゆる暗号のかなた」(Jenseits aller Chiffren) の探求の意義を考察するものである。存在の思弁の例としては、否定神学、クザヌスの反対の一致、エックハルトの神性、「何ゆえにそもそももあるものが存在し、何ゆえ無が存在するのではないのか?」という問い、等が挙げられている。存在の思弁は、それ自体としては経験や認識の対象とならない超越者を思惟により把握しようとする試みであり、思惟を究極まで押し進め、超越者の思惟不可能性に至り、思惟者自身の変化が促され、真に超越することを可能にするとされる。「暗号」は超越者の実存に対する現れであり、世界内で実存が手引きにする「象徴」とされ、神話や宗教的教説の中に保存されている。暗

号は超越者や実存の信仰に関するヤスパースの論考の中心を占めるものであるが、それを越えるような「かなた」を語る必要がなぜあったのかを究明したい。

存在の思弁の意義と思われることを、ヤスパースは「形而上学の自己止揚」ということで語っている。形而上学の自己止揚は二段階あり、第一段階は、「客観的事象形而上学」が展開された後での、カントによって行なわれたような「形而上学の暗号的性格の保持」であるという。客観的事象形而上学とは、内在的な事物と同様に超越的なものを語る形而上学と言え、超越的なものと経験的事物を区別していない。カントは経験の現象的性格を明らかにし、経験的事象と存在そのものを峻別した。そのことを踏まえるなら、超越者は現象界では暗号という形をとることが承認される。この第一歩は矛盾や弁証法により对象的思惟を超越する「非対象的思惟」により為されると言える。

そして形而上学の自己止揚の第二段階として、「あらゆる暗号のかなたへと超え出ること」が主張されている。超越者の現われである暗号は種々多様なものがあり、一つの暗号の世界に安住することが暗号の超出により否定されると言えよう。暗号はそれぞれ歴史的な正当性を有し、現実の生の導きとなってきたが、生の状況の変化や他の信仰との関係を考えて場合、一つの暗号に固執することは、実存にとって超越者との関係を失うことになる。その際暗号を超えたものへの眺望は、個々の暗号の絶対化を防止することになると言えよう。

しかし、存在の思弁は無化するもので、それだけでは、思惟の限界を示すものとして感銘を与えようとも、現存在の意味で

第2部会

は空虚と言える。実存による充実、すなわち歴史的な現実の中の自己存在による遂行、が必要と考えられる。個々の暗号により生を送る実存によるその暗号の止揚が行なわれれば、個々の暗号をそのつど無化することそのものが、実存の歴史性の承認という意味を持つ。なぜなら、そのつどの暗号を自らにとって唯一の現実と受け取るとは、それが歴史的で唯一絶対ではないが故に、歴史的な実存にとつては決定的であるという承認が必要と考えられる。普遍妥当な絶対性ではない、歴史的な無制約性や、超越者への連携の意識と自らの歴史的限界の意識を伴った充実が、存在の思弁により可能になると言えるだろう。

このような「存在の思弁」の論考により、実存と超越者の関係における思惟の機能が、暗号を純正ならしめるものとして、より積極的に捉えられるようになったと言える。また、個々の暗号が歴史的にのみ意味を持つことが承認されることにより、ヤスパースの主張する「理性による開かれた信仰」が基礎づけられたと言えるだろう。

脱宗教的精神性としての

ヤスパース「哲学的信仰」

大沢 啓 徳

「脱宗教的（世俗的）精神性（vulgar spirituality）」とは、

ダライ・ラマ十四世が提示する概念である。もしすべての人間に、他者を愛し慈しむという性質、すなわち仏性が備わっているならば、それは仏教徒だけの問題ではなく、すべての人間にとつての関心事でなければならない。しかし、宗教の教義として語られる限り、それは、宗教に対して興味を示さない、或いは宗教に対して拒否的な人々に、受け容れられることはないだろう。そこで、宗教という限定を離れ、各人を、各人が本来的に有している形而上学的な精神性へと差し向ける一つの方法として、ダライ・ラマは、この概念に期待するのである。

実存哲学者・ヤスパースの主張する「哲学的信仰（Der philosophische Glaube）」とは、まさに、このような精神性への喚起に他ならない。そこで本発表は、ヤスパースの「哲学的信仰」の構造と射程とを明らかにすることによって、「脱宗教的精神性」という概念の可能性に寄与することを目指した。

「哲学的信仰」は、或る教義によつて規定されるものでもなければ、特殊な経験を必要とするものでもなく、ただ、我々の常識的な思惟の遂行によつて、人間の在り方を把握し、超越的なものに触れようとする試みである。そのための思考訓練としてヤスパースが導入したのが「つつむもの（das Umgreifende）」という思想である。

ヤスパースによれば、人間は、現存在・意識一般・精神・実存という側面を持ち、また人間が存在することによつて、世界と超越という側面があるとされる。このうち、実存と超越は、それ以外の側面が「内在的なもの」であるのに対し、「超越的なもの」であり、これを意識化させることが脱宗教的精神性の